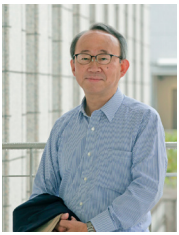
第30回
函館港イルミナシオン映画祭 2024
第28回シナリオ大賞
準グランプリ

パンと小麦粉とひまわり

大島 範之



【作者プロフィール】

大島 範之（おおしま のりゆき）

１９６０年、東京生まれ。大学卒業後、雑誌などで取材、編集業務に従事。人物インタビューやルポルタージュなどノンフィクション分野での取材経験が多い。シナリオ作品を愛読するあまり、脚本執筆の技術を学び始めた。

【人物表】

アンナ（２０）パン屋「ボルガ」の娘
森賢一郎（２４）海軍の少尉候補生
緒方太郎（１４）ガキ大将
才谷伊織（４２）船乗り
桃山八重（２６）娼婦
藤田達郎（５２）森の上官
緒方権之介（４４）太郎の父
ベロニカ（４８）アンナの母
銀行員
秘書官
子分
大男
赤い髪の娘

【あらすじ】

アンナ（２０）はロシアから亡命してきたウクライナ人の娘として、函館で生まれた。日米開戦が近づく昭和１６年、外国人を排斥する動きが、身辺に及んでいた。

母と営むパン屋・ボルガが、ガキ大将の太郎（１４）たちに攻撃された。思いを寄せている海軍の森賢一郎（２４）と協力して、ピンチを乗り越えるが、太郎の父である緒方権之介（４４）に逆恨みされてしまう。

ひどい仕打ちにあったアンナは、船乗りの才谷伊織（４２）や娼婦の桃山八重（２６）たちに「函館はいつだって、新しいものが上陸する」から、どんな衝突も乗り越えていくしかないと励まされる。

緒方が黒幕となって、海軍では森とアンナの交際が邪魔され、ボルガの商売も行き詰まってしまう。それでも「あきらめたら函館ではない」と決め、アンナたちは慰問団を装って海軍に乗り込む。森の上官である藤田達郎（５２）に、国と国の間で引き裂かれた悲しみを語り、「海軍の仕事は、誰かが海に引いた線をなくすことではないか」と訴える。作戦は成功し、ボルガに客が戻り、アンナは太郎とも仲良くなる。

藤田はアンナを見直し、密命を与える。森との仲を認め、ボルガを支援する代わりに、ロシアの教会を監視し、情報をもら

している不審人物を見つけろというのだ。

アンナは、ロシアを裏切って、自分の安泰をつかむという選択が正しいのか悩み抜く。答えが出ないまま、教会を監視するが、アンナはとらわれの身となる。反ウクライナの男に襲われ、太郎の機転で窮地を脱する。

ついに日米開戦となった。森は南方戦線へ赴任となる。アンナに「必ず結婚するから、必ず生きて帰る」と誓う。アンナも安全な地を求めて旅立つことになった。どれほど戦争で傷ついても、函館は必ず輝かしい町になることを信じ、アンナは船で去っていく。

○タイトル

「昭和16年・函館」

○ボルガ・外

通りに面した商店。
看板に「ボルガ」「パンと食事の店」と書かれている。
店の脇には小さな花壇があり、ひまわりの花が咲いている。
海が近く、カモメが鳴いている。
ガキ大将の緒方太郎（14）、子分を数人引き連れ、ボルガに近づく。
手には石を持っている。
太郎「総員、撃ち方用意！」
子分1「準備よし」
子分2「攻撃目標は、敵国ボルガ」
太郎「撃ち方、はじめ！」
子分たちが石を投げる。

○同・中

石が窓ガラスに当たる。
パンをこねていたアンナ（20）が悲鳴をあげる。
ガラスの破片が、アンナの金色の髪や色白の肌を襲う。
厨房の奥でコーヒーを飲んでいた森賢一郎（24）、驚いて立ち上がる。森は海軍の夏服である。
アンナ、表に飛び出そうとする。相手が子どもとわかり、森を目で制する。
アンナ、棚にあった丸いパンを手に、表へ出る。
森、窓際に立ち、心配げに外を見る。
このあと、適宜に森の表情がインサートされる。

○同・外

店からアンナが飛び出してくる。
子分たちが石を持って構えている。
子分1「敵が接近中！」
太郎「撃ち方用意！」
太郎、アンナが持っている丸いパンを見て、
太郎「注意せよ！　敵も攻めてくるぞ」
アンナ、両手を広げて、
アンナ「待って！　敵じゃない！」
太郎「敵だ。大きい石を持っている」
アンナ「これ？　石じゃない。パン」
アンナ、パンを突き出す。
太郎「来るぞ！　撃ち方用意！」
アンナ「（絶叫）黙れ！聞きなさい！」

太郎、子分、強い命令調に驚く。
アンナ「（絶叫）パンを食べて！」
太郎「敵の作戦だ。油断するな」
アンナ「この前も石、投げてきたでしょ。一度、食べてもらおうと思って、パンを焼いてあるの！」
子分2「ウソだ。ロシアはすぐウソをつくって、じいちゃんが言ってた」
アンナ「そんなことない。信じて。いまパンを持ってくるから」
太郎、状況を見極め、
太郎「撃ち方、やめ！」
子分たち、構えを解く。
アンナ「坊やたち、ありがとう。ちょっと待ってて」
アンナ、店に飛び込んでいく。
子分1「へへへ、坊やって言われちゃった」
太郎、子分1の頭をどつき、
太郎「スキを見せるんじゃない」

○同・中

アンナ、店の棚におさめてあった丸いパンを次々にお盆にのせていく。
森も手伝う。
森「アンナ、大丈夫か。悪ガキども」
アンナ「平気。森さんは、出てこない方がいい。まかせてちょうだい」
森「じゃあ、お手並を拝見するか」
アンナ「本物の海軍さんが出ていったら、あの子たち、腰抜かしちゃうよ」

○同・外

店の前に、アンナが現れる。
お盆にたくさんのパンをのせている。
アンナ「さあ、食べて！」
路上に子どもたちの姿はない。
アンナ「なんだ……」
アンナ、ため息をつく。
アンナ「つまんないの」
肩を落とし、店に戻る。

○同・中

アンナ、パンのお盆を店先に置く。
森「退散したのか」
アンナ「拍子抜け」
アンナ、ホウキ、ちりとりを出して、割れたガラスを片付けはじめる。

視線に気付き、入口を振り返る。
子分1、ひとりで戸口から中をのぞき込んでいる。
子分1「なんで怒らないんだ」
アンナ「えっ、どういうこと？」
子分1「ガラスを割ったのに、おかしい」
アンナ「いちいちやり返してたら、きりがないでしょ」
子分1、お盆のパンをにらみ、
子分1「それがパンか」
アンナ「食べてごらん」
子分1、ゴクンとノドを鳴らす。
子分1「なんで、食えっていうんだ？」
アンナ「これ、小麦粉を練ったの」
子分1「小麦粉？」
アンナ「日本だとウドン、外国だとパン。形は違うけど、同じ小麦粉を食べてるの。面白いでしょ」
子分1「ちっとも面白くない」
アンナ「お腹の中に同じもの入ってるのに、ケンカするの、ヘンでしょ」
子分1「よく分からん」
アンナ、パンをひとつ子分1に渡す。
子分1、我慢できず、パクつく。
アンナ「どう？　ヒマワリの種を塩漬けにしたのが、おヘソの所に埋めてあるの」
店の外から、
太郎「裏切り者！」
太郎、子分1をつまみ出す。

○同・外

太郎「敵の食いもん、食いやがって」
太郎、子分1のパンをたたき落とす。
パンが道に転がり、土で汚れる。
アンナ、色をなして、
アンナ「粗末にしないで！」
太郎、パンを拾い上げ、
太郎「なんだ、こんなもん！」
太郎、パンを放り投げ、花壇に咲いていたひまわりの花に命中する。
アンナ、目をつりあげ、ホウキをつかんで、ふりまわす。
アンナ「ひまわりを荒らすな！　あやまりなさい！　許さないからね！」
太郎、アンナの反応を見て、
太郎「これは面白い。敵の弱点を発見した。総員、花壇を攻撃せよ！」
太郎、子分、花壇に突入し、ひまわりの花をなぎ倒して

いく。
アンナ、ホウキをブンブンまわし、太郎ともみくちゃになる。
森「こりゃ、いかん」
森、仲裁に飛び込んでいく。
森「落ち着け、アンナ！　相手は子どもじゃないか」
アンナ「うるさい、森！　ひまわりだけは放っておけない」
アンナの剣幕に、森、一瞬ひるむが、
森「（大声で）静まれ‼　戦闘中止‼」
ピタッと太郎の動きが止まる。
太郎「本物の海軍さんだ！」
いつの間にか、野次馬たちがボルガを取り囲んでいる。
森、アンナ、ただならぬ気配を察し、身構える。
野次馬の中から、すっと着流しの緒方権之介（44）が前に進み出る。
太郎「お父ちゃん」
緒方「パン屋の娘さん、ずいぶん荒っぽく、息子の遊び相手をしてくれたようだな」
アンナ、小声で森に、
アンナ「誰？」
森「緒方。このあたりの顔役だ」
アンナ、緒方に向かって、
アンナ「イタズラごっこしてて、少し盛り上がりすぎたようです」
森「（アンナに）そんな言い方はよくない。はっきりさせた方がいい。（緒方に）これはアンナさんの正当防衛です」
緒方「正当防衛？」
森「少年たちは石を投げてボルガを襲いました。ガラスが割れ、アンナさんは身の危険を感じたんです」
野次馬たち、ざわつく。
緒方「ほほう。海軍さんがロシア娘の味方をするとは、驚きましたな」
森「事実をありのまま、述べたまでです」
緒方「事実？　真っ昼間から海軍の若造が、ロシア娘の店に入り浸っているという事実は、いかがなもんでしょう」
アンナ「やめてください！　そんな言い方。森さんは、きょう、非番です」
緒方「ここらへんじゃ、有名な話だ。昼間から逢い引きしてるって」
野次馬たち、どよめく。
アンナ「そんな、ふしだらじゃありません」
森「私たちは幼なじみで、それこそ兄妹同然に育ったんです」
緒方「まあ、男と女の仲をつつくのは、野暮ってもんだ。それより息子は将来、軍人をめざしている。そうだな」

太郎、うなずく。
緒方「海軍さんに聞きたい。いつ日本が米英と開戦してもおかしくない状況だ。軍国少年が血気盛んで何が悪いかな」
森「人に危害を与えることは、好ましくありません」
緒方「この先、ソ連とだって、いつ戦火を交えるか、しれたもんじゃないんだぞ」
森「アンナさんの一家は、そのソ連でひどい目にあって、函館に逃げてきたんです。みなさん、ご存知なはずです！」
緒方「それと同じくらい、ロシアのパン屋が嫌われていることも有名だ」
アンナ「戦争のせいよ。ちょっと前まで仲良しだった。いつ戦争になるか分からなくなって、人が変わっちゃった！」
緒方「外国憎し。子どもの戦争ごっこは世論だよ。世論。それなのに軍人が敵の肩を持つ。これが気に食わん」
野次馬たち。大騒ぎになる。
アンナ「なんで外国人だと、目の敵にされなきゃいけないんですか」
緒方「世界を見てごらんなさい。海外の圧力で、日本が孤立してるじゃないか」
アンナ「私はそんな外国人じゃない。函館で生まれて、函館で育ちました！」
緒方「娘さんの中に流れている血は、日本人のものじゃないだろう」
アンナ「私には函館の血が流れてます！」
緒方「じゃあ、それを見せてもらおうか」
アンナ、口をつぐんでしまう。
森「おい、待ってくれ。無理難題をふっかけるなよ」
緒方「これだけタンカを切ったんだ。もう後には引けないよ」
アンナ、しばらく黙って、考えをめぐらす。
緒方「さあ、娘さん、どうするんだ」
海の方で、海鳥が鳴いている。
アンナ、遠くに耳を傾けながら、
アンナ「カモメがきょうも群れてるわね」
アンナ、森に向かって、
アンナ「あれ、やろうか。久しぶりに」
森「そうだな。それしかないな」
緒方「なんだ、いったい」
アンナ「小さいころ、髪の毛や目の色で、さんざんいじめられた」
森「見返してやりたいって言うから、教えてあげたんだ」
アンナ、野次馬たちを見渡して、
アンナ「見た目は違っても、心はみんなと同じだと知ってほしかった」
アンナ、目を閉じて深く息をする。
森、アンナの呼吸に合わせ、

森「ソイ、ソイ、ソイー」
江差追分のソイ掛けである。
アンナ、歌いはじめる。
アンナ「国をはなれて　蝦夷地が島へヤンサノエー……」
野次馬たち、驚く。
江差追分か、とつぶやく人もいる。
堂々とした唄いっぷりに、緒方も目を見張っている。
森のソイ掛けも息があっている。
前唄が終わり、本唄に入る。
アンナ「かもめの　なく音に　ふと目をさまし　あれが蝦夷地の山かいな……」
誰もが黙って聴き入る。
本唄の途中で、車の止まる音がする。
漁網や自転車を積んだ小型トラックの荷台から、エプロンをつけたベロニカ（48）が飛び降りてくる。
前の座席から、長靴をはいた才谷伊織（42）と派手な化粧の八重（26）が下車してくる。
ベロニカ、才谷、八重、人だかりに驚きながら、アンナの唄声と森のソイ掛けに耳を傾けている。
後唄に入る。
アンナ「沖でかもめの　なく声聞けばネー」
野次馬たち、唄に合わせて体を揺らすようになり、うねるような盛り上がりを見せている。
アンナ「船乗り稼業は　やめられぬ～」
唄の余韻。
拍手が巻き起こる。
野次馬の声1「よっ！　心にしみた！」
野次馬の声2「函館の血が流れとる！」
緒方は、苦虫をつぶした顔。
トラックのそばで、ベロニカ、才谷、八重も拍手喝采である。
緒方、いまいましそうに去っていく。
アンナ、緒方の後について帰ろうとする太郎を呼び止める。
アンナ「待って」
太郎、立ち止まる。
アンナ、ポケットに手を入れて、ひまわりの種をひとつかみ取り出す。
アンナ「さっきは、ごめんね」
太郎、ぶすっと聞いている。
アンナ「これ、ひまわりの種。もともとママの生まれた遠い国にあったの。食べられるんだよ。かじってごらん」
アンナ、太郎の手に種を握らせる。
アンナ「私、いつもポケットに入れて、おやつ代わりにしてるの」

背後では、ベロニカが野次馬たちにパンを配っている。
アンナ、そのパンをひとつ、太郎に渡しながら、
アンナ「戦争ごっこもいいけど、石を投げる時は、誰かを守る時にしな。約束だよ」
太郎、素直に返事ができず、逃げるように去っていく。
アンナが、その背中に手を振る。

○同・外観（夜）

ボルガの看板が夕闇に包まれている。
窓ガラスに、修繕した跡がある。

○同・中（夜）

パン売り場の横にある食堂には、雑多な荷物が置かれ、営業していないことが分かる。
わずかにテーブルが残っていて、アンナ、森、才谷、八重が、簡単な食事をしている。
壁に、青と黄色で塗り分けられた旗が飾ってある。
アンナ、厨房にいるベロニカに、
アンナ「ママ、もういいから、こっちに来なよ」
ベロニカ「（やや片言の日本語。以下同様）びっくりしたわよ。配達中に何が起きたかと思った」
アンナ「お騒がせしました」
ベロニカ「才谷さんのトラックに乗せてもらったから、間に合って良かった」
アンナ「ママが頭下げることないよ。野次馬たちにパンまで配っちゃって」
ベロニカ「ナニ鉄砲だっけ。危ないこと」
森「ベロニカさん、それ無鉄砲です」
ベロニカ「そうそう。本当にこの子は無鉄砲なんだから。いつも後始末が大変」
森「最初は冷静だったんですよ。窓ガラス割れても、落ち着いていて」
アンナ「ひまわりの花壇を荒らされたら、カーッとなっちゃって」
八重「いいね。アンナらしい」
アンナ「ほめてくれるのは、八重さんだけ」
八重「あのひまわり、ベロニカが種を持ってきて、毎年、咲かせてきたんでしょ」
アンナ「ちょっと大人げなかった」
八重「相手が子どもだろうがなんだろうが、なめられちゃ、おしまいよ」
才谷「さすが夜の女王。気が強い」
アンナ、店の奥に飾ってある旗を持ってきて、
アンナ「この旗のこと、前にも話したと思うけど」

森「ウクライナの民族の旗だよね。青と黄色だけで、すごい大胆な配色」
アンナ「青は大空の色。黄色は小麦畑の色」
ベロニカ「もうひとつ、ひまわり畑の黄色とも言われているの」
八重「そんなに咲いてるんだ」
ベロニカ「ずーっと見渡す限り、ひまわり」
アンナ「いまソ連にいたら、この旗をあげるだけで逮捕されちゃうかもしれない」
ベロニカ「ウクライナから逃げ出すとき、何も持ち出せなかった。ひまわりの種だけポケットに入れてきた」
森「海を越えて、やっとたどりついた函館なのに、なんで今日みたいな仕打ちがあるのかな……」
才谷「港町ってとこは、そういうもんさ」
森「どういうことですか」
才谷「俺はカモメみたいな男だ。港がないと生きていけない。北から南まで、港を転々としてきた」
八重「よっ、女泣かせの船乗り！」
才谷「函館は、いつだって新しいものが上陸する。過去を消したいやつだって来る」
八重「それ、アンタのことじゃない」
才谷「お前だって、あっちの港、こっちの港で男から甘い汁、吸ってきたくせに」
八重「船乗りが一番いいのよ。金は持ってるし、胸板は厚い。また船で出ていくから、あとくされもない」
才谷「ベロニカたちが日本に来た時も、函館が玄関口だっただろ」
ベロニカ「人が集まるから、仕事があった。ロシア教会もあったし」
才谷「金も仕事も宗教もやってくる。男も女もやってくる。それが港町だ。函館だ」
八重「そんなキザなセリフで、女くどいてきたんでしょ」
才谷「新しい波と波がやってくるんだ。ぶつかり合うのは仕方ない。アンナも、ベロニカも、それは覚悟しなきゃ」
アンナ「その通りね。船乗りさん。なにかお代わりしますか」
才谷「明日は早いから、これくらいにしておこう。森君、非番だろ」
　才谷、森に酒をつぐ。
才谷「函館は、なんであんなに夜の明かりがきれいか、分かるか」
森「狭いところに人がたくさん暮らしてるからじゃないですか」
才谷「アンナは、どう思う」
アンナ「なんだろう。海が暗いからかな」
才谷「そうだ。いつだったか、月も星もない夜に、俺は船の甲板から、息をのむような思いで眺めていたことがあった」
八重「これも口説き文句ね」

才谷「下北半島は真っ暗だ。渡島半島も光がない。海に反射するものがない。真っ暗だから、函館が輝いて見えた」
八重「もったいぶって。何が言いたいのよ」
才谷「森君、アンナ」
森・アンナ「はい」
才谷「いずれ戦争になる。真っ暗になる。つらいぞ。でもな、その暗さを越えないと、本当の光も分からない。それまで我慢だ」
才谷、立ち上がり、
才谷「酔い覚ましに歩いて帰る」
ベロニカ、才谷の背に回り、
ベロニカ「そこまで送ってく」
ベロニカ、才谷に優しく寄り添い、
ベロニカ「明日はイカ釣り？」
才谷「いや、北洋漁業だ。ウラジオストックまで」
ベロニカ「気をつけて行くのよ」
ベロニカ、才谷、店を出ていく。
八重、その背中をじっと見て、
八重「お似合いかも」
アンナ「え？」
八重「ベロニカ、惚れてるよ」
アンナ「やだあ。ママの年で」
八重「まだ若いし、綺麗だよ。今ごろ、外でキスしてるかもしれない」
アンナ「やめて！」
八重「パパが亡くなって何年になる？」
アンナ「もう4年かな」
八重「そろそろ、いいんじゃない」
八重、部屋を見渡し、
八重「食堂を閉めて、パン屋だけにして、女2人でがんばってきたんだから」
アンナ「そうかな」
八重「ね、最後にさ、もう一度、聴かせて。江差追分。しびれちゃった」
森「ずいぶん久しぶりだったから、緊張しちゃいましたよ」
八重「アンナには、唄の意味が、少し難しくないの？」
アンナ「それが、よくわかるんです！」
森「意味を教えたら、もう夢中」
アンナ「はるばる蝦夷までやってきた人の心というのは、日本人でもウクライナ人でも変わらないと思うんです」
八重「息はぴったりだった。あんたたち、本当に添い遂げたいんだろ」
アンナ、森、答えに窮してしまう。
八重「さっき、船乗りが言ってた通りだ。もっと大変なことが

ある。しっかりね」
八重、アンナと森の手をかたく握る。
八重「さ、頼むよ。名調子」
アンナ、軽く息を整え、歌い出す。
アンナ「国をはなれて　蝦夷地が島へヤンサノエー……」
江差追分がしみじみと聞こえる中、ボルガの夜が更けていく。

○函館独立戦隊・外観

兵舎正面の門柱に「海軍函館独立戦隊」と書かれている。

○同・中・隊長室

森、机の前で、直立不動。
隊長の藤田達郎（52）が森をにらんでいる。
藤田「森君、こんなことで、将来ある君の経歴に傷をつけたくないから、まずは正直に答えてほしい」
森「はい。隊長にまで、ご心配をおかけし、申し訳ございません」
藤田「アンナという女性だが、いわゆる白系ロシア人ということになるね」
森「ソ連に革命政府が樹立した1920年代に、彼女の両親が、日本に亡命したと聞いております」
藤田「赤い革命に抵抗した白いロシア人ならば、共産主義の心配はないな」
森「はい。自由を求めて海を渡ったので、そのような傾向はありません」
藤田「そうか。あまり自由すぎて、帝国軍人と白昼堂々、逢い引きという通報があるのも、困ったものだがね」
森、一瞬、絶句してから、
森「いったい、どこからそんな通報が」
藤田「真っ昼間から、野次馬が群がる騒ぎとなれば、市民も黙っていないだろう」
森「逢い引きではありません」
藤田「白い肌。ブロンドの髪。青い瞳。その美貌にふぬけにされ、軍人にあるまじき行動を取ったとの通報だ」
森「なんですって！」
藤田「あげくの果てには、江差追分を気持ちよさそうに唄い上げ、その場を煙に巻いて退散したそうだ」
森「（小さく）くそっ、あの男だな」

○（フラッシュ）ボルガ・外

緒方、苦虫をかみつぶしている。

○もとの函館独立戦隊・中・隊長室

藤田、森をにらみつけ、

藤田「要は世間の目に、どう映るかだ。いつ米英と開戦の火蓋が切られるかもしれないのだぞ」
森「はい！」
藤田「常在戦場だ！」
森「はい！」
藤田「それを忘れてはならぬ時に、ロシアの美女と江差追分か！」
森、何も言い返せない。
藤田「そのアンナという女性とは今後、非番であっても、接触してはならぬ」
森「そ、それは……彼女は幼なじみで、その出身ゆえ、悩みも多く……」
藤田、てのひらで話をさえぎって、
藤田「森君、君の家は松前藩士の家系で、海軍兵学校の成績も優秀だった。少尉候補生として、前途洋々ではないか」
森「はい」
藤田「いまこうして、津軽海峡を守るため編成された独立戦隊で、重大な使命を担っている」
藤田「はい」
藤田「輝かしい未来とロシアの娘。それを君は天秤にかけるというのか」
森「天秤……」
藤田「まあ、まだ若いし、色男だから気の迷いもあるだろう。今回の件は大目に見る」
森「もう、会ってはいけないのですね」
藤田「そうだ。君のためだし、国のためにもなる。分かったな」
森、目をかたく閉じ、声が出ない。
藤田「いずれ、いい女房は探してやるから、まずは職務に専念しろ」

○（フラッシュ）ボルガ・中（夜）

八重「あんたたち、本当に添い遂げたいんだろ。さっき、船乗りが言ってた通りだ。もっと大変なことがある。しっかりね」
八重、アンナと森の手をかたく握る。

○もとの函館独立戦隊・中・隊長室

森、閉じていた目を開き、
森「自分は大馬鹿者であります」
藤田「ん？何を言うんだ」
森「お国のためにも尽くし、不運な女性のためにも尽くすという生き方は、認められないのでしょうか」
藤田「貴様、本気で言っているのか」
森「本気でなければ、こんな馬鹿なことは申し上げられません」

藤田「大義や大局を見失って、恋愛の感情に流されるつもりか」
森「いえ、大馬鹿者ですから、大義も、人を好きになることも、両方、成就したいのであります！」
藤田「帝国海軍の軍人として、それが正しい判断だと思うのか」
森「わかりません！」
藤田「わからない？」
森「わからないから、苦しいのであります。失礼いたします！」
森、藤田に一礼して、一目散に退室してしまう。

○同・中・廊下

森、廊下の壁に背をつけて、
森「ああ、言ってしまった。ああ……」
森、両手で頭をかきむしる。

○同・中・隊長室

藤田、席で腕を組んで、
長官「大馬鹿者か」
何やら思案している。

○緒方家・外観

立派な門構え。
表札に「緒方」とかかっている。

○同・中・居間

着流しの緒方、デスクで呼び出し電話をかけている。
緒方「いや、先生、先日の議会では、実に立派な演説でした。心から敬服いたします」
緒方、たばこに火をつけ、
緒方「何を言いますか、私に儲けなどいらんのですよ。この緒方、お国のためになることしかいたしません」
緒方、うんうんとうなずき、
緒方「そうです。先生のお力で、ちょいと締め上げてもらえれば、敵国勢力の撃退になろうというものです」
緒方、上機嫌であいさつをして、受話器を置く。
手帳をめくり、鉛筆でチェックをしながら、冷たい笑いを浮かべる。
緒方の死角になっている居間の端。
太郎の体が半分だけ見える。
太郎、緒方の様子を盗み見ている。

○銀行・中・ロビー

窓口で預金を下ろしたアンナを銀行員が呼び止め、商談の机に向き合う。
銀行員「ボルガ様へのご融資に、審査部が新しい判断を出しま

した。書面です」
銀行員、書面を見せる。
アンナの顔が険しくなっていく。
アンナ「何かの間違いですよね」
銀行員「融資の延長はしない決定です」
アンナ「なんで急に。おかしいじゃないですか。理由を説明してください」
銀行員「審査部の判断です」
アンナ「父の代から変わらず、融資を継続してくれたじゃありませんか」
銀行員「ええ。ただ、いまは女性お2人での経営です。その点が信用調査で議論されたようです」
アンナ「ロシアの女2人に金を貸しても、返ってこないと言いたいんでしょ！」
銀行員「決して、そのようなことは」
アンナ「審査の人に会わせてください」
銀行員、チラッとカウンターの中を見る。上役の男が首を振っている。
銀行員「あいにく、お得意様との約束で席を外しておりまして」
アンナ「（大声で）逃げないでよ！」
ロビーの視線がアンナに集中する。
ひそひそと「大騒ぎになったパン屋」「海軍さんをたらしこんだ女」と話す客もいる。
銀行員「もう一枚、書面がございます」
銀行員、また書面を出す。
アンナ「なによ、これ」
銀行員「返済のお願いです。期日が決まっております」
アンナ「お金は貸さない。だけど、お金は返せっていうの！」
銀行員「ご融資の延長を打ち切った時点で、すみやかに返済していただくのが、私どものルールです」
アンナ「どこにお金があるっていうのよ！」
銀行員「その場合は、担保となっている土地や家屋を預からせていただくことになりますので、ご承知おきください」
アンナ「日本人は、こんな冷たいんだ」
銀行員「冷たいとか、優しいとか、関係ございません。金融の原則に従ったまでです」
アンナ「困ったときに助けてくれるのが銀行でしょ！」
銀行員「どんなお困りごとにも、ご相談に乗ります」
アンナ「貧乏人は相手にしないくせに！」
アンナ、書面をつかみ、荒々しく出ていく。

○ボルガ・中（夕）

憔悴した顔でアンナ、帰ってくる。
パンをこねる台の横で、ベロニカ、帳面を広げて悩んで

いる。
アンナ「ただいま」
　アンナ、ベロニカの顔を見て、
アンナ「何かあったの」
ベロニカ「さっき仕入れ業者の人が来たの」
アンナ「それで」
ベロニカ「小麦粉が手に入らないんだって」
アンナ「ええ！」
ベロニカ「もうボルガには納められない。取引はこれでおしまいと言ってきた」
　アンナ、椅子にへたりこむ。
アンナ「なんで、そんな急に」
ベロニカ「国がお米や小麦粉を蓄えるから、もう出回ってこないっていうのよ」
アンナ「もう、あっちも、こっちも」
　アンナ、帳面を広げて、
アンナ「どこか小麦粉を分けてくれるところ見つけないと」
　アンナ、必死な顔で帳面をめくる。

○同・中（夜）

　アンナ、才谷と向き合って、話し込んでいる。
才谷「お手上げだな。金もなけりゃあ、小麦粉もない。何か裏があるな」
アンナ「そう思う？」
才谷「あいつじゃないか」
アンナ「緒方」
才谷「逆恨みしてるんだよ」
アンナ「もともとは、子どもの戦争ごっこのいざこざだよ」
才谷「戦争が近いから、みんな狂っちまうんだよ。誰かを目の敵にして、攻撃しないと気がすまない」
　扉の開く音がする。
　八重、店に入ってくる。
アンナ「こんばんは」
才谷「ちょうどいい。まずいことになった」
八重「こっちも変な話、聞いちゃったんだ。森君、干されてる」
アンナ「森さんが！」
才谷「ただの噂じゃないだろうな」
八重「アタシの客で海軍のお偉いさんがいるんだけど、そいつから」
才谷「確かなのか」
八重「ベッドの中で聞いたんだから、間違いない」

○同・外観（夜）

　月明かりに照らされたボルガ。

野犬が遠くで鳴いている。

○同・中（夜）

アンナ、椅子から立ち上がって、

アンナ「じっとしてられない。これから会ってくる！」

才谷「まあ、待てよ」

八重「ちょっと座って」

アンナ、椅子に腰を下ろす。

八重「資金繰り。小麦粉。森。どれも八方塞がりか。みんなつながってるな」

才谷「まず、間違いない」

アンナ「お金や小麦なんか、なんとかする。森さんだけは助けたい。ボルガはどうなってもいい」

才谷「どこを攻めるかなあ」

アンナ「海軍の偉い人に直談判する」

八重「正面から行っても、会ってくれない」

アンナ「森さんに手紙を書く」

八重「会えない女からの手紙ほど、切ないものはない」

アンナ「ビラをまいて、仲間をつくる」

八重「捕まるのがオチ」

アンナ「どうすればいいのよ！」

八重「森ちゃんは、海軍という組織に、がんじがらめになってる。その海軍をアッと言わせて、風穴を開けないと」

才谷、じっと考え、組んでいた腕をほどき、

才谷「アンナ、さっき森のためなら、ボルガがどうなってもいいと言ったな。あの覚悟は本当か」

アンナ「うん」

才谷「ちょっと策があるんだが、下手するとボルガも一巻の終わりになっちまう」

アンナ「かまわない。あきらめないで、またやり直す。ママも分かってくれると思う」

才谷「さすが函館の女だな」

八重「どういうこと」

才谷「ここは、やり直しのきく町だ。何度も函館大火で燃えたが、みんなやり直した。一からやり直す奴が集まる町だ」

アンナ「この前、新しい人が上陸して出直すのが函館だって言ってたでしょ」

才谷「ああ」

アンナ「それが函館のいいところ。私とママも、何度だってやり直して、あきらめないから」

才谷「それでこそアンナだ」

アンナ「あきらめたら、函館じゃない！」

才谷「よし。次は八重だ。さっき海軍のお偉いさんと深い仲だと言ってたな。うまく利用できるか」

八重「まかしといて。素っ裸にして、弱み握ってるから」
才谷「じゃあ、決まった。一か八かだぞ。よく聞け」
　アンナ、八重、前のめりになって、才谷に身を寄せる。

○函館独立戦隊・中・会議室（朝）

　朝の会議が終わり、三々五々、参加者が退室していく。
　秘書官が藤田に耳打ちする。
秘書官「隊長は、お残りください」
藤田「朝早くから、私が対応するほどの相手なのか」
秘書官「総務からの強い要望です。取材のカメラもついているようです」
　藤田、軽くうなずき、席で待つ。
　人がはけ、ドアのところで秘書官、
秘書官「お見えになりました」
　かっぽう着を着た八重、カメラを首からさげた才谷、入ってくる。
秘書官「函館あけぼの慰問団の方です」
　八重、うやうやしく、
八重「隊長、本日はお忙しい中、お時間をいただき、誠にありがとうございます」
藤田「いえ、こちらこそ」
八重「私たち慰問団は、まさに戦雲たれこめる今こそ、帝国海軍の皆様の奮闘、ご努力に報いたいと念願しておりました」
　才谷、横からフラッシュをたいて、写真を撮る。
八重「本日は慰問ということで、心ばかりの品物をお届けに参りました」
藤田「かたじけない」
八重「目録でございます」
　藤田、目録を開く。
　「慰問の品パン１００個」とある。
藤田「パンですか。１００個も。これは、部下たちも喜ぶでしょう」
才谷「隊長、目録を開いて、一枚。慰問団の方も並んでください」
八重「あっ、これ着なきゃ」
　八重、肩から「函館あけぼの慰問団」のタスキをかける。
　隊長、八重、目録を左右で持ち、ポーズ。シャッターが切られる。
　廊下の外が騒がしい。
　秘書官、出ていく。
　八重、風呂敷包みを開け、
八重「できたてを持って参りました。ぜひご賞味を」
　藤田、ほおばる。
藤田「うまい。これは逸品だ」
　才谷、手帳を取り出し、

才谷「ぜひ、感想をお聞かせください」
藤田「函館独立戦隊一同、士気が上がることはまちがいない。
　このパンは、まさに力強い援軍です」
才谷「パンはもともと外国の食べ物ですが、海軍の皆さんのお
　口に合いますか」
藤田「むしろ海軍は、海外の文化を積極的に取り入れてきまし
　た。パンは大好きです」
　　才谷、にやりと笑って、
才谷「そうですか。大変に貴重な取材となりました。ありがと
　うございます」
藤田「こちらこそ、感謝に堪えません」
　　秘書官、入室してきて、
秘書官「隊長、皆、大変に喜んでおります」
　　藤田、けげんな顔になり、
藤田「なんのことだ」
秘書官「このところ張り詰めた空気が続いていたので、上官の
　皆様のご配慮に、朝から活気がみなぎっております」
八重「パンは焼きたてが命。少し行儀は悪いですが、すぐ食べ
　られるよう、許可をいただいております」
　　藤田、にぎやかな声のする廊下に出ていく。

○同・中・吹き抜けの廊下（朝）

吹き抜けの廊下から、1階のロビーが見下ろせる。
藤田、ロビーで隊員や職員に、次々とパンを配っている
人を見つける。髪が金色である。アンナだ。
その頭には「必勝」の鉢巻き、肩から「函館あけぼの
慰問団」のタスキ。
藤田「あの女！」
　　藤田、振り返ると、もう八重、才谷はいない。
藤田「やられた！」

○同・中・ロビー（朝）

パンを配るアンナに、「必勝」の鉢巻きを締めながら、
八重が加わる。
才谷が写真を撮る。
アンナ「海軍さん、いつもありがとうございまーす。慰問のパ
　ンです。焼きたてをお召し上がりくださーい」
八重「隊長にも食べていただきました。士気が上がるとお褒め
　をいただき、私たち慰問団も大感激でーす」
　　隊員や職員がパンをかじり、顔をほころばせている。
　　あらかた配り終えたころ藤田が現れ、アンナに近づいて
　　いく。
　　ハッと気が付き、身構えるアンナ、八重、才谷。
藤田「あなたがアンナさんだね」

アンナ「きょうは慰問に参りました」
藤田「隊長の藤田だ」
八重と才谷、顔を見合わせ、小声で、
才谷「予定にないぞ。大丈夫か」
八重「まかせましょう」
八重、才谷、かたずを飲んで見守る。
藤田「どういう風の吹き回しですか」
アンナ「ご覧の通りです」
藤田「森君のため、ご機嫌うかがいなら、お門違いですよ」
アンナ「そんな簡単なことではないことは、承知しています。もしお会いできたら、伝えたいことがありました」
藤田「遠慮なく、おっしゃってください」
アンナ「海軍の兵隊さんは、みんな海を越えて働いてますよね」
藤田「もちろんです」
アンナ「海には一本の線も引かれていないのに、偉い人たちは、なんで国と国を分けてしまうんでしょうか」
藤田「面白いことを言いますね」
アンナ「私の両親はウクライナ人ということでソ連に迫害されました」
藤田「亡命されたと聞いています。白系ロシア人ですね」
アンナ「日本ではそう色分けしますが、人間に赤も白もありません」
藤田「当事者からすれば、そのような思いでしょう」
アンナ「今度は日本に来たら、ソ連を捨ててきたというのに、ロシア人としていじめられました」
藤田「お気の毒なことです」
アンナ「海軍の人の仕事というのは、本当は誰かが海に引いた線をなくすことなんじゃないでしょうか」
藤田、虚を突かれ、言葉を選ぶような口調で、
藤田「それぞれの国の間で、緊張関係がある限り、我が国の防衛ラインは、断固死守しなければなりません」
アンナ「日本。ソ連。ウクライナ。国と国の間に線を引いたのは、誰なんでしょう。その線の上で、私は苦しんでいます」
藤田「その線があるからこそ、保たれている世界秩序があるのではないでしょうか」
アンナ「森さんは幼なじみで、彼だけが私と何の分け隔てもなく遊んでくれました」
藤田「そういう男だ」
アンナ「誰かが引いた線を飛び越えてくれる人でした。そんな彼を応援したい。だからパンを持ってきました」
藤田「そのお気持ち、頂戴しました」
アンナ「森さんをよろしくお願いします」
藤田「私も森君は可愛い。しかし、軍隊に私情はない。国益が何より優先される。生きるか死ぬかだ。規律が重んじられる」

アンナ、少し気を落とし、
アンナ「（小さく）壁は厚い」
藤田「ご苦労様でした」
藤田、去り際に、
藤田「もうひとつ、いただこう」
アンナ、パンを差し出す。
藤田「このパンが美味しいことは、間違いない。船の上でも食べさせてやりたい」
去っていく藤田の背中を、アンナ、ほろ苦い笑みで見つめている。
八重、才谷、よくやったと言わんばかりに、ひじでアンナをつつく。

○ボルガ・外観

ボルガの看板の横に、取って付けたように「函館あけぼの慰問団」の真新しい看板が見える。
店の壁には、壁新聞のように「慰問団だより」が張ってある。
「隊長も士気が上がると談話」「海軍はパンが大好き」「ボルガのパンは力強い援軍」の見出しが躍っている。
隊長と八重のツーショットも大きく引き伸ばされている。

○同・中

パン売り場には、客が群がり、アンナやベロニカと会話が弾んでいる。
客「客が戻ってきたね」
ベロニカ「おかげさまで」
客「海軍さんのお墨付きだ」
アンナ「まだまだ火の車なんですよ。財布はカラッポ。仕入れもその日暮らし」
ベロニカ「包みの中に、慰問団だよりのガリ版、入れときますから宣伝してください」
客「はいよ」
客が帰っていく。
アンナ、表に緒方が立っていることに気付く。ベロニカのひじをついて、表をアゴで指す。

○同・外

緒方、苦々しく、壁の慰問団だよりをにらみつけている。
手を伸ばして、破こうとした瞬間、
アンナ「もし破いたら、帝国海軍への侮辱になりますよ」
緒方の手が止まり、わなわな震える。
緒方「このままですむと思うなよ」

緒方、アンナに毒づいて、大股で去っていく。
アンナ、太郎がひとりで残っていることに気が付く。
アンナ「こんにちは」
太郎、じっと慰問団だよりを見上げている。
太郎「パンをつくると、海軍さんは、喜んでくれるの？」
アンナ「うん。喜ぶんでくれた」
太郎「お国のためになるんだ」
アンナ「そうだね」
太郎「難しいの」
アンナ「なにが」
太郎「パン」
アンナ「つくってみたいの」
太郎、コクリとうなずく。
アンナ「おいで」
太郎を店の中へ誘う。
アンナ「コツをつかめば、できるよ」
アンナ、太郎、ボルガの中に入っていく。

○函館独立戦隊・中・隊長室（夜）

藤田、席で書類の決済をしている。
ドアがノックされる。
藤田「入れ」
森「森賢一郎、入ります」
森、藤田の前に立つ。
藤田「あけぼの慰問団の件は、すでに聞いておるな」
森「騒ぎが大きくなってしまい、申し訳ありません」
藤田「よく分かったよ」
森「はい？」
藤田「森君が軍の規律を犯しても、会いたくなるだけのことはある」
森「自分はあの後、彼女に会っていません」
藤田「大胆不敵な女だった」
森「いささか無鉄砲です」
藤田「彼女にも話したが、軍隊の組織に私情をはさめない」
森「その通りであります」
藤田「ただし、組織の役に立つとなれば、話は別だ。使いようがあるかもしれん」
森「彼女を使うのですか？」
藤田「全く意見がかみ合わなかったが、いい勉強になった」
森「は？」
藤田「終わりのない戦争はない。米英との戦も、いつか終わる。その時に必要なのは、彼女のような女性かもしれない」
森「そうであれば、いいのですが」
藤田「密命を与える。彼女に会ってこい。君との交際も自由だ。

ただし条件がある」
森「密命？交際？」
藤田「心を鬼にしないとできない仕事だぞ。耳を貸せ」
森、長官に顔を寄せる。

○ボルガ・外（夜）

店のドアが開き、ベロニカ、才谷、八重が出てくる。
ベロニカ「ごめんなさい。せっかく来てくれたのに」
才谷「大丈夫かな。久しぶりに会ったけど、森君、人が変わったみたい」
八重「海軍のお許しもらったっていう気配じゃないね」
ベロニカ「あの子たち、珍しく2人きりで話したいっていうから、私も部屋で一杯やるわ。おやすみなさい」
ベロニカ、才谷、八重、別れる。

○同・中（夜）

アンナ、森、差し向かいで座っている。
森の顔が険しい。
森「俺をうらまないでくれ」
アンナ「久しぶりに会って、なによ、それ」
森「これがアンナにも、ボルガにも、ベロニカさんにも、一番いい選択だと思う」
アンナ「だからなによ」
森「坂の上にロシアの教会があるだろ」
アンナ「鐘が鳴るところね」
森「礼拝に行ってたよな」
アンナ「神様にお祈りしてると心が安らぐ」
森「礼拝に来る人の顔は分かるか」
アンナ「知ってる人もいるけど、新しい信者や日本人はよく分からない。ウクライナ人が嫌いな人たちもいる」
森「実は海軍が見張っている」
アンナ「教会を？」
森「機密がもれていて、教会が中継点になっている」
アンナ「礼拝者の中にあやしい人がいるということ？」
森「工作員。またはその協力者」
アンナ「信じられない。神様の前でそんなことしてるの？」
森「海峡に面している函館は、海防の要だ。諜報活動の舞台にもなる」
アンナ「ちょっと待って、そんな秘密を打ち明けるということは。まさか」
森「隊長からの指名だ」
アンナ「ウソでしょ！」
森「工作員が誰か、つきとめてほしい」
アンナ「神様の前で、そんな人を欺くことができるわけない！」

森「隊長はアンナを気に入っている」
アンナ「勝手に気に入らないでよ！」
森「大胆不敵で知恵が回る」
アンナ「（興奮して）スパイの素質があるっていうの！」
森「しー、声が大きい。これは2人だけの秘密だ」

○同・外（夜）

ボルガの外で、緒方が壁に張り付き、聞き耳を立てている。

○同・中（夜）

森「外国の領事館や、宗教施設には、日本の軍や警察も介入できない」
アンナ「だから私なの！」
森「目の前にある教会なのに、手が出せないんだよ」
アンナ「私にだって、ロシアの血が流れてる。なんで仲間を売らなきゃいけないの」
森「そんなの分かってる」
アンナ「日本の手先になりたくない！」
森「それも分かってる」
アンナ「だったら、こんな話やめて。もう帰って」
森「待ってくれ……この仕事を条件に、隊長が俺たちの仲を認めてくれる」
アンナ「えっ？　なにそれ」
森「交際を許してくれるんだ」
アンナ「スパイになれば、交際できるって、おかしくない？」
森「それだけじゃないんだ。ボルガを守ることができる」
アンナ「ボルガを？」
森「海軍がボルガのパンを買い取ってくれるんだ。すごいだろ。アンナのパンが、ずっと売れるんだぜ」
アンナ「うそ……」
森「ボルガの経営も厳しいんだろ。そんなことまで調べてたよ」
アンナ「恐ろしい人」
森「これで、一気に問題が解決する」
アンナ、手で顔をおおってしまう。
アンナ「試されてるような気がする」
森「誰に」
アンナ「神様に」
森「なにを言ってるんだ」
アンナ「ロシアや神様をあざむいて、それでつかんだものが、本当の幸せなの」
森「いまさらロシアに義理立てして、どうするんだ。神様だって、いつになったら、振り向いてくれるというんだ」
アンナ「日本の言いなりにならないと、森さんも、パンも、み

んな逃げていっちゃうなんておかしいよ」
森「その逆だ。日本を利用してやろうじゃないか。どんな手を使っても、生き残らなくちゃいけない」
アンナ「わからない。もう、だめ。私はやっぱり、どこの国の人間にもなれない」
森「隊長が言ってた」
アンナ「なにを？」
森「どんな戦争もいつか終わる。アンナのような女性が必要になるのは、戦争が終わってからだろう」
アンナ「そんなことを」
森「だから、神様に怒られようが、天罰が下ろうが、アンナには、生き抜いてもらいたいんだよ！」
アンナ「卑しい人間になってまで、生き延びたくない」
森「いつだったか、みんなで話しただろう。函館がなんで、輝いて見えるか。覚えているか」
アンナ「海が……暗いから」
森「そうだ。その暗さを知らないと、本当の光も分からない。怖がるな」
アンナ「いやだ。こんな取引をしたら、地獄に落ちてしまう」
　アンナ、森にすがりついてくる。
森「もう戦争は近い。暗い地獄を通り抜けないと、光は見えないんだ」
森、かたくアンナを抱きしめる。

○同・外（夜）

緒方、冷たく笑いながら、ボルガを去っていく。

○教会・中・聖堂

ロシア正教の聖堂。
神父が祈りを捧げている。
後方の席にアンナが座り、さりげなく全体を見回している。
アンナの隣に年老いた女性がいて、口の中でぶつぶつ祈っている。

○同・外

教会の鐘が鳴っている。
アンナ、敷地を注意深く歩いている。
秋の花が美しい花壇で足を止める。
帽子をかぶった男が、黙々と花壇の土をいじっている。
オルガンの音がする。
音のする部屋を外からのぞくと、赤い髪の少女が聖歌を弾いている。
何か飛び出し、アンナ悲鳴を上げる。

黒い猫が足元を走り抜けていく。

○ボルガ・中（夜）

アンナ、森と密談している。

アンナ「老婆。帽子の男。赤い髪の娘。黒い猫。もう、みんな怪しく見えちゃって、わからない」

森「危険なまねはしないように。不審な者を発見したらそこまで。接触はしない」

アンナ「わかってる」

森「そういえば、海軍の兵舎を見学したいと言ってたガキ大将がいたな」

アンナ「太郎君ね」

森「早い方がいいな。日付を決めてくれ。案内する」

アンナ「早い方が……」

森「もう開戦への流れは、止まらない。日に日に加速している」

アンナ「もうそんなに……近いうちに、礼拝の後、教会の前で待ち合わせてみる」

アンナ、厳しい表情になる。

アンナ「神様に平和を祈りながら、スパイみたいなことして、私いったい何やってるんだろう」

森、なにも言い返せない。

○教会・外観

教会の高い塔。

鐘が鳴っている。

○同・中・聖堂

アンナ、聖堂で頭を垂れ、深い祈りを捧げている。

アンナ「（心の声）どうか争いのない世を与えてください」

頭が低い分、下の方がよく見える。

数列前で、赤い髪の少女が、身をかがめている。椅子の下に手を伸ばす。

アンナ「（心の声）オルガンの子？」

少女、座席の底面から小さな紙片をはがし、ポケットにしまう。

アンナ「（心の声）まさか」

○同・外

聖堂から人が出てくる。

赤い髪の少女が人混みをすっと抜け、小走りになる。

後を追うアンナ。

少女、聖者の像の裏側で黒い服を着た男に紙を渡す。

アンナ、目を見張る。

アンナ「（心の声）あんな小さな子が協力者なの！」

少女は男と別れ、オルガンのある部屋に走って行く。
アンナ「(心の声)でも、確かにあの子なら、人の目をあざむける」
アンナ、考えながら、歩き出す。
アンナ「(心の声)いや、できない。私には告発できない。あんな小さな子を犠牲にするなんて。黙っていよう」
アンナ、神に祈るように、胸の前で両手を組む。
背後で足音が迫る。
アンナ「きゃあ!」
アンナ、何者かに連れ去られる。

○同・外・正面の門

門の前で太郎が待っている。
待ちぼうけをくらい、つまらなそうな顔をしている。

○わら小屋・中

狭い小屋に、わらが積まれている。
アンナ、窮屈な姿勢で、猿ぐつわをされている。手足の自由はきく。
ロシア人の大男、緒方、アンナを見下ろしている。
大男「(片言の日本語。以下同様)いま外してやる。大声を出したら、口をふさぐぞ」
大男、猿ぐつわを外す。
アンナ「どういうことよ!」
大男「裏切り者め」
アンナ「赤い髪の子と仲間なの?」
大男「違う。緒方さんから、お前が教会をさぐっていると教えてもらった」
アンナ、緒方をキッとにらみ、
アンナ「私をハメて、そんなに楽しい」
緒方「これでもう、お前の居場所はない。身分違いの男にほれ、金欲しさに祖国を裏切った。みじめな女だ!」
アンナ「なんてことを」
緒方「恥さらし! 函館から出てけ」
アンナ、顔をそむける。
大男「ウクライナ人は信用できない。モスクワに報告する。共産主義の敵だ」
アンナ「ウクライナを侮辱しないで」
緒方「そんなことを言う資格があるのか」
大男「そうだ。日本軍の犬め!」
アンナ「違う。違うのよ」
緒方「なにが違う。お前は海軍に、あの赤い髪の子を突き出すところじゃないか。犬だよ。犬!」
アンナ、首を激しく振り、
アンナ「そんなことなしない。私は黙っているつもりだった」

大男「またウソが始まった。ソ連の恥だ」
緒方「ワッハッハ。ざまあみろ。いい気味だ」
アンナ「私は、そんな女じゃない」
アンナ、泣き伏してしまう。
緒方の高笑い。

○教会・外・正面の門

太郎、手持ちぶさた。
足下の石ころを蹴りはじめる。
転がる石をまた蹴って、どんどん門から離れていく。
また蹴ろうとして、足を止める。
太郎「あれ？」
太郎、石ころの横に落ちているものを拾い上げる。
太郎「ひまわりの種だ」
太郎、きょろきょろする。
太郎「あった！」
別の種を見つける。
太郎「これ、お姉ちゃんが……」
太郎、道に落ちてる種を次々と見つけ、道を進んでいく。
行く手に、わら小屋が見えてくる。
その手前で、ひまわりの種は途切れている。

○わら小屋・中

大男がハサミの切れ味を確かめるように、カチャカチャ音を鳴らしている。
アンナ「なにするつもり」
大男「髪の毛を切る。坊主みたいな頭にしてやる」
アンナ「やめて！」
緒方「そりゃあ、いい」
大男「ヨーロッパでは、こうやって、女に生き恥をさらす」
アンナ「人でなし！」

○同・外

わら小屋の前に太郎がいる。
粗末な小屋で、あちこちに隙間があいている。
板の節目から中をのぞく。

○板の節目の中

太郎の目線。
アンナが押さえつけられている。
ハサミの刃がぎらりと光っている。
残忍な目をした大男。
緒方の姿までは、太郎に見えない。

○わら小屋・外

太郎が棒立ちになる。

○同・中

ハサミで迫る大男。

大男「その髪の毛を切って、モスクワに送ってやろう」

アンナ「いったい何の意味があるの」

緒方「こういう時、舌をかみ切って死ぬ女もいたんじゃないか」

大男「ああ、いた、いた」

大男、舌なめずりをしている。

アンナ、にらみ返し、

アンナ「舌なんか、かむもんか！　何があっても、生き抜く」

大男「生意気なウクライナ女！」

緒方「ソ連まで裏切って！　日本の恥だ」

アンナ「ソ連とか、ウクライナとか、日本とか、小さいこと言ってんじゃねえ！　私はハコダテの女だ！」

緒方「往生際の悪い女だ。あきらめて、詫びでも入れたら、どうだ」

アンナ「あきらめないのが、函館だ！」

緒方、大男に、

緒方「引導を渡してやってくれ」

アンナ、目をギラギラさせ、

アンナ「髪を切るなら、切ってみろ！　だがな、ハコダテの心は切れないぞ！」

ロシアの大男「面白い」

大男、襲いかかる。

ハサミの刃が、アンナの髪をとらえた瞬間、小屋に石が飛び込んでくる。

ゴツンと大男にぶつかる。

第2弾、第3弾と降ってくる。

緒方「なんだ、これは」

アンナ「この石は！」

○同・外

太郎、構えを解き、

太郎「撃ち方、やめ！」

小屋に向かって、

太郎「突撃！」

○同・中

絶叫とともに、太郎が小屋に突入してくる。

アンナ、緒方、驚き、

アンナ「太郎君」

緒方「お前」
　大男、ハサミで太郎に反撃しようとするが、
太郎「お姉ちゃんは、悪い人じゃない」
　太郎、なぜ小屋に父親の緒方がいるかも分からず、
太郎「お姉ちゃんをいじめないで」
緒方「なんでお前、石なんか投げたんだ」
太郎「約束したんだよ！」

○（フラッシュ）ボルガ・外
　アンナ、太郎にパンを渡しながら、
アンナ「戦争ごっこもいいけど、石を投げる時は、誰かを守る時にしな。約束だよ」

○もとのわら小屋・中
　緒方、呆然として、
緒方「誰かを守る……そんなことを、この子に。参ったなあ」
　大男、ぽいっとハサミを捨てる。
　太郎、緊張が解け、顔をくしゃくしゃにして泣きはじめる。
　アンナ、優しく抱きとめ、
アンナ「ありがとう。よくひまわりの種を見つけてくれた。助かったよ。最後まであきらめなくてよかった」
　太郎、アンナの胸に顔を押しつけ、涙が止まらない。

○タイトル
「昭和16年12月8日」

○モンタージュ
　真珠湾の奇襲攻撃が成功したことを告げるラジオ放送にのせて、新聞の紙面や映像が流れる。
　日の丸の旗がゆれ、出征する軍人が万歳で送られる。
　日本とアメリカが交戦状態に突入したことを伝える。

○ボルガ・外観
　雪まじりの冷たい雨が、ボルガに降っている。
　店頭に張り紙がしてある。
「本日、臨時休業」

○同・中
　テーブルを囲んでアンナ、森、才谷、八重、ベロニカ、太郎。
　卓上には、ささやかな料理、お酒、ジュースが並んでいる。
　才谷、グラスを手に、
才谷「では森君の前途に栄光あれと祈って、乾杯といきますか」

森、軍人らしく凛々しい表情で、
森「しっかり、南方戦線で務めを果たして参ります」
ベロニカ、しんみりと、
ベロニカ「それって、おめでたいことなのかしら。戦争に行くんだよ」
八重「そう言われちゃうと、そうよね。万歳で送り出す気持ちにもなれない」
才谷「やめとくか。乾杯なし。適当に飲んではじめちゃおう」
それぞれがグラスを傾け、料理に手をつけていく。
八重「森ちゃん、南方戦線に行ったら、現地の女におぼれちゃだめよ。モテるだろうけど、ほどほどに」
森「変なこと言わないでください！」
八重「メソメソしたの嫌いだから、ぱーっと明るく別れたいのよ」
森「郵便事情はいいんで、向こうからハガキ書きますよ。アンナさんにも送ります」
アンナ、言いにくそうに、
アンナ「ありがとう。でも、ハガキの送り先が、そっちから届かないかもしれない」
森「えっ。どういうこと」
アンナ「函館を出ていくことにした」
森「そんな。聞いてない」
アンナ「ごめん。言いそびれて。あれだけ守ってくれたのに、出ていくなんて、言いづらくって」
ベロニカ「戦争になったら、もう外国人には何が起きてもおかしくない」
才谷「遅かれ早かれ、強制的に退去命令が出るだろう」
八重「でも、どこ行くの」
才谷「ウラジオストックに連れていく」
八重「ああ。あそこか」
才谷「北洋漁業で裏の世界とパイプがある。あそこなら、アンナとベロニカも、もぐり込めるはずだ」
太郎「遠いの？」
アンナ「また港町。そんな遠くない」
太郎「バラバラになっちゃうんだ」
アンナ「そんなことない」
太郎「だってお兄ちゃんは南に行って、お姉ちゃんはその港町に行くんでしょ」
アンナ「別れじゃない。出発よ」
太郎「悲しいよ」
アンナ「悲しむことじゃない。どんな別れだって、その先に、新しい出会いが待ってるんだもの」
太郎「そうなの」
アンナ「函館は旅立つ人のためにある。ここは港町。どんな海

にもつながってる」
森「函館はまた帰ってくるところでもある。太郎、心配するな。
また函館に戻ってみせるから」
アンナ「私も帰ってくる」
太郎「約束だよ」
アンナ「約束する」
森「約束する」
八重「なんのために帰ってくるか、分かってるよね、お2人さん」
アンナ、森、目を合わせる。
八重「男も女も、黙ってちゃあ、永遠に結ばれない。口に出して言いなさい」
もじもじしている森、アンナ。
八重が見かねて、
八重「森少尉候補生！起立！」
森、背筋を伸ばして立つ。
アンナも立ち上がる。
森、ハラを決めて、
森「アンナさん、生きて帰ってきたら、結婚してください」
アンナ、少し考え、
アンナ「それって、森さんが死んだら、私、結婚できないじゃないですか」
森、思い直して、
森「アンナさん、必ず結婚しますから、必ず生きて帰ります！」
アンナ、パッと顔を輝かせ、
アンナ「はい。結婚しよう！」
八重「よし、よく言った！」
拍手が広がる。
ベロニカ「これは乾杯しなきゃ！」
八重「そうだ、そうだ」
才谷「よし、みんなグラスを持ってくれ。いいか。必ず結婚するために、必ず帰ってくる森とアンナに乾杯！」
一同「乾杯！」
太郎、胸をどんとたたいて、
太郎「ウクライナのひまわり、育てるよ。帰ってくるころは、ここらへん、ひまわりだらけで、真っ黄色にしておくよ」
アンナ「それ、いいね」
ベロニカ「ウクライナみたい」
笑い声がはじける。
才谷「太郎、八重、俺もそうだが、函館の留守を預かるのは、覚悟がいるぞ」
太郎「どうして」
才谷「何度も函館大火で焼けたけど、また戦争でやられることだってある。津軽海峡は敵も狙ってくだろう」
森「海の交通を遮断するため、何をしてくるかわからない」

八重「そうね。戦争は怖い」
アンナ「函館は、それでもよみがえるよ。ここは、そういう町だもの」
才谷「ベロニカ、アンナ、人目につかないように、今度の月のない晩、俺の船でウラジオストックまで送る」
アンナ「分かった」
ベロニカ「出発ね」
才谷「しばらく見納めだぞ。函館をよく見ておけよ」
アンナ「海や半島が暗いから、町の明かりが美しく見える」
才谷「海どころか、戦争で町も真っ暗になる時がきてもおかしくない」
アンナ「きっとまた、みんなやり直す」
才谷「そうだな。その後に、本当に光り輝く函館になるのかもしれないな」
森「アンナさんには、そんな時代の函館に生きてもらいたい」
森とアンナ、見つめ合う。

○港・桟橋（夜）

函館の港の外れ。
桟橋から漁船が出航していく。
甲板にアンナ、ベロニカ。
才谷が舵を握っている。
桟橋で、八重が手を振っている。
八重「悪い男に注意するんだよー」
アンナ「やだ八重さん、最後まで、そんなこと言って。ありがとう！」
八重、アンナ、ベロニカ、ちぎれるほど手を降る中で、船が沖に遠ざかっていく。

○沖合（夜）

暗い海に、ぽつんと漁船。
月も星もない。
渡島半島も闇に溶けている。
ただ、函館の町の明かりだけが、宝物を集めたように、光っている。
アンナ、その明かりを凝視している。

（了）

第30回函館港イルミナシオン映画祭2024

第28回シナリオ大賞　準グランプリ受賞作品

パンと小麦粉とひまわり

作：大島　範之

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2025年2月10日　電子書籍版発行

発行：函館港イルミナシオン映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町４番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037　http://hakodate-illumina.com/

制作：い一ハコダテ事務局

〒042-0942 北海道函館市柏木町31-15-207

TEL 0138-52-3727　https://www.ehako.com/